様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１１６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５０８

研究課題名（和文）語彙意味論を活用した日本語情態修飾関係の研究

研究課題名（英文）A lexical semantic approach to Japanese adverbial modification

研究代表者
井本　亮（IMOTO, Ryo）

福島大学・経済経営学類・教授

研究者番号：２０３６１２８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は語彙意味論の活用を通じて様態副詞・結果副詞を横断する情態修飾関係の体系的記述を行うことである。研究計画に従い、コーパス調査による実証的研究と修飾関係の構文意味論的分析を行ってきた。研究成果として、研究論文３件・口頭発表６件を公表した。
　本研究の意義は５点ある：①情態修飾関係の分析でのコーパス調査の有効性を示した②情態修飾の構文機能として「詳述指定機能」を導入し情態修飾関係の多様な事例に構文的基盤を与えた③情態性形容詞が程度を限定する事例を指摘した④②の導入に基づき状態変化動詞の語彙意味論的分析を深化させた⑤日本語教育文法で不十分な形容詞連用修飾の学習に資する実証的分析を行った。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project is to explore the semantic diversity of adverbial modification construction (AMC) with lexical semantic approach. During the research period, I exemplified the following. First, the adverbial “akaku” (redly) modifies not only COLOR, but also OUTER-SURFACE in the “Akaku V” construction, which makes “to swell red” grammatical. Second, among Japanese as Second Language learners, the degree reading of AMC has a significantly lower score than the other readings although this degree reading appears in the corpora most frequently. Third, the adjectives of material property such as “okiku” (big) have the degree reading that was hardly observed in the previous literatures. Fourth, Japanese resultative construction and AMC share the common semantic function called “further-specification.” This constructional function motivates the diverse readings of ACM. The results of this study would encourage further research on the cross-semantic phenomena of ACM.

研究分野：現代日本語の情態修飾、連用修飾、結果構文、動詞意味論

キーワード：情態修飾　連用修飾　副詞的修飾　結果構文　形容詞　語彙意味論　日本語教育文法　コーパス

１．研究開始当初の背景

(1) 矢澤(2000)、仁田(2002)に代表される情態修飾成分(情態副詞)の研究は「様態」と「結果」の対立を軸とした用例の分類によって飛躍的に進展した。しかし、この分類法には次の問題がある。様態と結果の分類には 2 つの異なる対立［ウゴキのサマ/モノのサマ］の意味範疇的対立と［過程相/結果相］のアスペクト的対立が未分化のまま内包されている。このままでは、「影が大きく映る」などの［過程相のモノのサマ］や「題名が大きく変わる」などの［結果相の変化のサマ］が分析できない。また、固定的な分類が定着した影響から中間的で連続的な修飾関係の分析、記述的知見の蓄積が進んでいない。2000 年代以降の日本語の「情態副詞／情態修飾／副詞的修飾／副詞的成分」に関しては十分に研究が進んでいないのが現状である。

(2) 一方で、影山(1996)、小野(2005)に代表される語彙意味論では＜語彙の意味は意味的構成要素によって構造化される＞という理論的知見のもとに語彙の意味の内部構造の分析が進められ、「壁を赤く塗る」「花瓶を粉々に割る」などの日本語の結果構文(結果副詞)について優れた研究成果が蓄積されている。情態修飾関係も成分間の意味的整合性に基づいて成立しているため、修飾関係の意味の内部構造に切り込んだ分析に活用できると期待される。しかし、語彙意味論の目標は統語と意味のインターフェースの理論化であり、日本語の情態修飾関係の体系的記述には単純に適用できないという問題がある。

さらに、修飾関係の分析は現行の語彙意味論の目標から外れており、結果副詞も二次述語に位置づけられる例に限られている。その他の事例は副詞として考察から除外されており、日本語の情態修飾関係の特徴、情態修飾関係の全体像の理解ができない。

(3) 上述のような現行の研究状況では「風船が大きく膨らんだ」「字を大きく書いた」「花瓶が大きく割れた」「小屋が大きく焼けた」「題名が大きく変わった」などの「大きく」による修飾関係の連続性と多様性が解明されるべき問題として認識されない。「手が赤く腫れる」「炭が赤く熾る」など、情態修飾関係の意味解釈に名詞の語彙情報が関与する事例についても同様である。日本語の結果構文は副詞的修飾関係であり、情態修飾関係の全体像、特に動作様態修飾と結果修飾の連続性を分類上のラベルでなく、構文的関係として精確に捉える必要があり、それには語彙意味論のアプローチが有望である。その上で、語彙意味論の射程外にある事例に取り組んでいかなければならない。理論的枠組みの単なる適用ではなく、情態修飾研究が抱える問題点を理論的に補完・改善していく研究が求められているのである。

２．研究の目的

(1) 情態修飾関係を「情態修飾成分と被修飾成分の間の意味的整合・調整プロセス」として還元的に捉える視座の有効性が示される。既存の分類ラベルや理論的予測だけでなく、大規模コーパスデータの調査によって個々の事例の具体的な意味解釈を丁寧に観察していく手法をとるのが本研究の特長である。これにより見過ごされてきた言語事実の掘り起こしと記述的知見の蓄積が期待できる。

(2) 現行の語彙意味論では副詞的情態修飾関係の分析に着手した研究はない。語彙的意味の間の意味的整合性と調整プロセスに着目する本研究の記述的成果から語彙意味論の理論的枠組みに対する重要なフィードバックを提供することが期待できる。

３．研究の方法

研究期間を通して、大規模コーパスから探索的に得た用例と作例による言語データの観察による意味解釈の記述的分析を進め、各記述的成果を学会口頭発表および学会誌への論文投稿によって順次公表していくことが研究活動の中心になる。３年目には記述的成果の理論的枠組みへの理論的フィードバックの検討を始めるとともに、還元的な視座に立った情態修飾関係の文法論的研究につなげるため、意味範疇を横断する情態修飾関係の体系的記述の作業に着手する。

４．研究成果

本研究の研究成果は、形容詞連用形による情態修飾関係の意味と解釈が〈形容詞連用ク形＋動詞〉で構成される構文形式と、その構文機能〈詳述指定機能〉によって要請される修飾関係の構成成分間の意味的整合のあり方によって導き出されるものであることを実証的に明らかにしたことである。以下、研究計画の時系列に沿って、雑誌論文の成果を中心に述べる。

(1) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』にみられる副詞的修飾関係「赤くＶ」について」〔雑誌論文(3)〕では形容詞連用形「赤く」が構成する副詞的修飾関係の実態について『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』および検索ツール「Ninjal LWP for BCCWJ（NLB）」を用いて調査し、その結果、「赤く」が色彩変化動詞ではない動詞：「腫れる・熟する・錆びる」などの外形的サマ変化動詞や「見える・光る」などの発光や表示に関する動詞などとも修飾関係を構成することを指摘した。本稿ではこうしたサマ変化動詞が表す意味を「モノの表面に現れて視覚的に認識されるサマ」＝［外面（がいめん）］という意味範疇の下位類として特徴づけることを

提案した。修飾限定の性質に鑑みると、「赤く」が修飾対象とする意味範疇は単なる色ではなく、それを包摂する上位の意味範疇［外面］である。このように考えることで先行研究が提案した意味強制の導入や例外的事例として扱う必要はなくなり、修飾関係の意味解釈の多様性をより合理的に、より広い射程で捉えられるようになる。また、データには「燃える・焼ける・熾る」など燃焼に関連する動詞との修飾関係があり、これは修飾限定の成立に名詞の語彙情報が関与していると考える必要があることを示唆している。本項の議論の要諦は次のようにまとめられる：

① BCCWJ における副詞的修飾関係「赤く V」の用例では、その被修飾成分（V する）は色彩変化動詞、外形的サマ変化動詞、［光・表示］に関する動詞、［燃焼］に関する動詞の意味クラスに分布している。

②「赤く」の修飾対象となる［色］を包摂する上位の意味範疇［外面（モノの表面に現れて視覚的に認識されるサマ）］を導入すると、「赤く V」の修飾関係の多様性と共通性が説明できる。［外面］は「腫れる・かぶれる」などの外形的サマ変化動詞や［表示］に関わるモノに含意される意味範疇で、［色］や［形］などを包摂する。これによって［赤＜色＜外面］の包摂関係が無矛盾に成立し、「赤く腫れた」の成立や多重修飾の現象が説明される。

③［外面］と［赤］の包摂関係が成立する意味的基盤はサマ変化に関わるモノ固有の特質である。「赤く V」が成立するとき、動詞が表す事象に［赤］を含む［外面］を持ったモノの関与がなければならない。モノがどのような意味範疇を持つかは、語彙の情報（クオリア）に記載されており、語彙の情報は修飾関係の整合的な意味解釈のために参照される。

本稿の意義は結果構文として一面的に扱われてきた「赤く V」について、コーパス調査による実証と情態修飾関係としての構文意味論的分析によって、現象の多様性と意味範疇にもとづく統一的な分析を示したことである。また、その他の色彩形容詞による情態修飾関係の分析にも直ちに援用ができる点で有望である。

(2) 次に、「連用修飾関係「大きく V」について―学習者の理解とコーパス」〔雑誌論文(2)〕では、日本語教育文法への貢献を視野に入れた実証的な分析を行った。これは本研究の展望として期待される日本語教育シラバスへの貢献を見据えてのものである。

形容詞「大きい」と動詞（V）で構成される情態修飾関係「大きく V」の意味は動詞に応じて多様である。ここで重要なことは、「大きく V」の修飾関係の多様性は、連用成分による被修飾成分に対する修飾限定という構文関係の原理に則ったもので決して特殊な現象ではないということである。むしろ、「大きく V」の解釈は情態修飾関係の本性を映し出す格好の現象であるといえる。そこで本稿では「大きく V」の修飾関係の７タイプについて、日本語学習者の理解度と難易度評価を調査した。調査の結果、「大きく変わる」など程度を表すタイプの理解度が有意に低いこと、対照的に、大規模コーパスの調査ではこのタイプが用例数の上位を占めることがわかった。本稿の主張は次のようにまとめられる。

①「大きく V」の修飾関係はタイプによって学習者の理解度に差がある。動詞との組み合わせでは「切る・変わる・破る・進歩する・崩れる・変更する」、修飾関係では分割変化・変化範囲・変化の程度タイプの理解度が低い。

②「大きく V」の修飾関係はタイプによって学習者が感じる〈わかりやすさ〉に差がある。動詞との組み合わせでは「濡れる・破る・割る」、修飾関係では分割変化と変化の範囲をわかりにくいと感じている。

③「大きく V」の構文では BCCWJ と TWC（筑波ウェブコーパス）の両コーパス全用例中 21.1%の割合で「変わる・分ける・異なる・変化する・影響する」の５つの動詞が現れる。このうち、「変わる・異なる・変化する」は変化の程度、「分ける」は分割変化、「影響する」は変化範囲を表す。この３タイプは学習者の理解度と難易度評価において、理解度が低い・わかりにくいと感じているタイプに該当する（上記②）。さらに、両コーパスの頻度上位 20 位中 18 件が変化の程度を表す。

本稿ではこの調査結果から、「大きく V」については変化の程度を表すタイプを選択・集中して指導することが有効であること、この現状に対して日本語学の通説の分類が有用ではないことを指摘した。本稿の意義は、本研究の研究方法・アプローチが語彙教育に偏りがちな日本語教育の副詞教育においてほとんど看過されている形容詞連用修飾の学習にも有効な指針を与えた点である。

(3) 次に、「詳述指定機能からみた日本語の結果構文とその周辺」〔学会発表(2)〕では、「大きく V」の情態修飾関係の意味的多様性と構文的共通性について、先行研究の視座の問題点を指摘し、より射程の広い視座を取ることの必要性と有効性を主張した。まず、使役状態変化構文にもとづく結果構文の枠組みでは現象分析に必要な射程が取れないこと、分類指向型の分析が修飾関係の多様性の理解に有効でないことを指摘し、情態修飾成分が動詞述語文に含まれる情態概念を特定するという「情態修飾成分の詳述指定機能」を導入し、情態修飾関係の意味的多様性が詳述指定対象の多様性に由来すること、「壁を赤く塗る」などの典型的な結果構文も変化主をありかとする情態概念に対する詳述指定として統一的に捉えられることを例証した。本発表の提案と主張は以下の通りである。

① 情態修飾成分は述語動詞句が表す事象に含まれる情態概念を詳述指定する。詳述指定

される情態概念は修飾成分の上位概念である。
② 修飾関係の多様性は詳述対象の多様性に由来する。
③ 日本語のいわゆる結果構文は〈詳述指定される対象が状態変化動詞の被動主＝変化主に含まれる情態概念で、それが状態変化動詞の定項に記載されたタイプ〉の情態修飾文である。その詳述対象が結果相のモノのサマであれば、その意味解釈は結果述語と近似する。

本発表の意義は、結果構文・語彙意味論研究の成果を認めながらも、日本語の情態修飾文（情態修飾関係）の分析が取るべき射程・目的と必ずしも合致しないことを確認し、〈形容詞連用ク形＋動詞〉で構成される構文形式の共通性と還元的なアプローチによって、情態修飾関係の研究に構文意味論的な分析の枠組みの基盤を整えたことである。

(4) 最後に、「『ケーキを大きく切った』をめぐって―一体性変化の修飾」〔雑誌論文(1)〕では、「皿が粉々に割れた」「ケーキを大きく切った」のような実体の物理的変化に関わる変化事象について分析した。まず、変化事象の一類として、実体の物理的なまとまり方に関する変化［一体性変化］を導入した。そして、〈変化主（被動主）の元の一体性が保持されない〉という一体性変化の固有の特徴が従来の使役状態変化構文にもとづく結果構文分析の前提と相容れないこと、これが結果様態副詞のような例外的扱いの要因となっていたことを指摘した。さらに、情態修飾成分が一体性変化に関わるサマを詳述指定するという構文機能的観点から分析することで、分割・着装・集積配列など、偶発的・散発的に見える言語事実に体系的位置づけが与えられること、一体性変化にせよ、いわゆる疑似結果構文にせよ、先行研究のような分析の射程を狭めるような例外的扱いをすることなく自然に説明できることを示した。本稿の主張は次のようにまとめられる。
① 一体性変化の定義：実体の物理的・空間的・形状的なまとまり方に関する変化を「一体性変化」と呼ぶ。一体性変化は変化事象の下位類である。一体性変化が起こると変化主体（動詞の項名詞句の指示物）は元のあり方では存在しなくなる（変化主体の同一性の喪失）。
② 一体性変化の下位タイプと指示物のズレ：一体性変化には分割系だけでなく、合一系（交替動詞・着装動詞）・配列／集積系（配列動詞）など〈指示物のズレ〉の方向性の異なる３タイプがある。一体性変化の概念によって、これらの３タイプの事例を体系的に捉えることができる。
③ いわゆる見せかけの結果構文（Spurious Resultative）の一部については、産出・変成事象へのタイプシフト分析は不要で、動詞が表す一体性変化事象とそれに伴う指示物のズレとして説明できる。

本論文の意義は、内質的な状態変化と物理実体の状態変化を明確に分離し、後者を一体性変化と定義づけることで、先行研究でうまく説明できなかった分割系の状態性変化の結果構文を動詞の語彙的意味クラスから自然な説明を与えたこと、特に、着装や配列に関する例外的事例に統一的な説明を与えたことである。

本研究は語彙意味論とそれを補完する構文意味論の複合的な視座に立ち、コーパス調査によって実証的に記述を進めるという手法によって、以上の研究成果を得た。本研究のアプローチは形容詞による連用修飾構文の用法の記述と述語動詞の語彙的意味構造の内部を精査に貢献する。これをさらに推進することによって、今後のさらなる研究成果につながることが期待される。

また、研究当初は予見していなかった新たな知見として、様態・結果の対立にとどまらない程度限定用法への拡張現象がある。これはこれまでほとんど指摘されたことのない事例である。このことは、学習者の形容詞連用修飾の理解度の問題とともに、コーパス調査、語彙意味論における尺度構造の検討など、さらに多角的な観点のもとでさらに記述・分析を進めていく必要があることを示唆している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

(1) 井本亮「『ケーキを大きく切った』をめぐって―一体性変化の修飾」『商学論集』84 巻 3 号, pp.17-35, 福島大学経済学会, 2016 年（査読あり）
http://hdl.handle.net/10270/4381

(2) 井本亮「情態修飾関係『大きく V』について―学習者の理解とコーパス」『日本語／日本語教育研究』6 号, pp.63-78, 2015 年（査読あり）

(3) 井本亮「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』にみられる副詞的修飾関係「赤くＶ」について」『商学論集』（査読あり）福島大学経済学会, 82 巻 1 号, pp.1-19, 2013 年（査読あり）htt://hdl.handle.net/10270/3843

〔学会発表〕（計 6 件）

(1) 井本亮「連用・構文・修飾をめぐって―論点の整理」現代日本語文法研究会第 12 回大会, 2016 年 2 月 16 日, 筑波大学東京キャ

ンパス（東京都文京区）

(2) 井本亮「詳述指定機能からみた日本語の結果構文とその周辺」日本語文法学会第 16 回大会, 2015 年 11 月 16 日, 学習院女子大学（東京都新宿区）

(3) 井本亮「情態修飾研究の方法と日本語教育文法への活用をめぐって」現代日本語文法研究会第 11 回大会, 2014 年 12 月 6 日, 大東文化大学（東京都板橋区）

(4) 井本亮「『大きく』を学習者はどのように理解しているのか」日本語／日本語教育研究会第 6 回大会, 2014 年 9 月 28 日, 学習院女子大学（東京都新宿区）

(5) 井本亮「「ケーキを大きく切った」をめぐって―一体性変化を表す動詞文」第 132 回関東日本語談話会, 2014 年 3 月, 学習院女子大学（東京都新宿区）

(6) 井本亮「副詞的修飾の“すきま”をめぐって―意味的アプローチの論点と課題」現代日本語文法研究会第 10 回大会, 2013 年 12 月 3 日, 大東文化大学（東京都板橋区）

６．研究組織

(1) 研究代表者

井本　亮（IMOTO, Ryo）
福島大学・経済経営学類・教授
研究者番号：20361280